

第84回 病態生化学セミナー

日時：平成26年10月3日（金曜日）午後6時00分～

場所：医学部 図書館3階 視聴覚室

演題：家族愛の神経・遺伝基盤

Neural and molecular mechanisms underlying family love

演者：長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 神経機能学 教授

篠原 一之 先生

人類において、「愛」を超える報酬はないと言われる。「愛」とは、総じて愛着関係にある特定の個体同士が抱く陽性感情で、時にはリスクや負担を伴いうる他者とも「絆」と呼ばれる特殊な関係性（安定的かつ利他的な人間関係）を形成することができるのである。現在、ヒトにおける様々な情動の神経基盤が明らかになりつつあるが、ヒトの「家族愛」というカテゴリーで、その構成員の間に築かれる「愛」の家族愛の神経・遺伝基盤を解明しようという研究はない。

「家族」の構成員は、一般的には祖父母、父母、子であると考えられる。家族の生物学的意義は、一義的には子を“適切なパートナー選択”を可能にする「愛着行動」を身につけるべく養育し、更なる次世代を創出することにあると考えられる。子の「愛着行動」のパターンは自らの遺伝子的背景と共に、両親、祖父母の養育行動によって形成されると考えられる。かくて、父母、祖父母の養育行動を動機づける「愛」の神経・遺伝子基盤の解明は重要である。また、子が「愛着行動」を身につけていく強い動機づけは、父母、祖父母に対する「愛」という感情であろう。しかし、幼少期の父母、祖父母に対する依存的な愛着関係は、思春期を迎えると反抗期を迎え、対象や関係性自体にも変化が生じる。親友、恋人ができ、家族から独立し、社会的・性的同一性を獲得するのである。

そこで、本セミナーでは、主に、家族「愛」の中でも、母性「愛」、父性「愛」、祖母性「愛」に加えて、思春期前後の男子の母親に対する「愛」の発達的变化について、神経・遺伝的基盤について概説したい。

【篠原 一之】

連絡先：

浦野 健

島根大学 医学部 病態生化学

TEL 0853-20-2126

E-mail turano@med.shimane-u.ac.jp

博士課程選択必修科目：基礎医科学(3)、

博士課程選択科目：細胞生物学I(6)、老化II(20)、発生生物学I(15)、発癌I(22)、腫瘍生物学I(24)、II(25)、III(26)、臨床腫瘍学I(28)、II(29)、III(30)、IV(31)、V(32)、VI(33)、地域がん治療学(37-1)、口腔腫瘍学(37-2)、薬物動態学I(70)、腫瘍免疫学I(79)、理工医学のための生物材料学(103)

医科学専攻(修士課程)選択科目：

腫瘍の発生・増殖とその制御、理工医学のための生物材料学の基礎を履修している学生は、できる限りこのセミナーに出席してください。